

五月雨のつつじが丘で紡ぐ “令和の日本型学校教育”

副校長 小山 進治

五月雨を 集めて早し 最上川 松尾芭蕉
五月雨や 大河を前に 家二軒 与謝蕪村

六月に降る長雨を「ツユ」（梅雨）と呼び、「サミダレ」（五月雨）とも呼びます。冒頭の二句は五月雨を季語とした松尾芭蕉と与謝蕪村の俳句です。この「サミダレ」は田の神（サガミ）の水がしたたるという意味からきており、六月は旧暦の五月にあたるため、表記としては「五月雨」の漢字をあてています。校庭で遊べない子どもにとって梅雨は残念な時季ではありますが、自然や大地にとっては潤いの賜物です。「雨降って地固まる」ということわざもあるように、雨が人やものに幸いをもたらすことも多々あります。学校生活においても梅雨どきだからこそできる学びがあります。芭蕉や蕪村に想いをはせながら、様々な場面で学校として創意工夫を尽くし、つつじが丘で学びの糸を意図的に紡いでいきます。

さて、令和5年度の教育活動も早いもので2か月が過ぎました。先月からコロナも法令上五類に分類が変わりました。法的には制限がなくなった今後の教育活動ですが本校としては、だからこそ従来の教育活動の見直し、地域と連携した学習活動の再構築、感染症対策も考慮した上での水泳学習、宿泊学習や校外学習の実施を教職員で検討しながら進めています。さっそく先月は校庭に全校集合しての音楽集会を3年ぶりに実施しました。また1年生は昨年度同様、徒歩での藤が丘公園遠足を実施しましたが、3年生は電車を使ってこどもの国への遠足を実施しました。宿泊学習については先月末、6年生が日光に修学旅行へ行ってきました。本校の子どもにとって必要な学びを整理し、付けるべき力を明確にした授業創りを工夫しながら、カリキュラム・マネジメントを推進しています。

カリキュラム・マネジメント推進をする上で注目すべきは、コロナ禍真っ只中の令和3年1月26日、中央教育審議会から答申された「令和の日本型学校教育」です。この答申のキーワードは「個別最適な学び」と「協働的な学び」です。2つの学びのポイントは次の通りです。（中央教育審議会答申から一部抜粋して紹介します。）

◆「個別最適な学び」を進める上で・・・

- ・「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に子供の成長やつまづき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲を踏まえて指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。
- ・その際、ICT活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を利活用することや、教師の負担を軽減することが重要

◆「協働的な学び」を進める上で・・・

- ・知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供、子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達する Society5.0 時代にこそ一層高まる。
- ・同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや、ICTの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合いも大切

このポイントを踏まえた上で、それぞれの学びを一体的に充実させることが、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につながると、解説されています。

風薫る つつじが丘に ほっこりと 取り合う手と手 あふれる笑顔

先日、行われた体力テストの様子を見て、私自身で一首詠んでみました。6年生が1年生の面倒をよく見ながら、校舎や校庭を移動していました。コロナ禍では難しかった手をつなぐ風景も、学校生活の日常として戻ってきました。子どもを真ん中にした、子どもたちの笑顔があふれる学校創りを今月も心がけていきます。